





繪本左圖記二篇卷之八

目録

淺井長政家期

夏吉即到京極高次館

三好義次玄弘

今川氏真屬信長幕下





繪本左近記二篇卷之八

源氏長政家期

誠も源氏長政へいふにして、ええ政の令を賜け其後みせ害をば。信長の音信を行じて、ひそかに小姓小団の妻にゆきあつたるゝ隠かげ入り長政のあらす政を害の次第を詳々論述。そのまゝ脇きりて記す。されば長政大きて歎息深く信長を恨むるゝよしもう。妻よみがへん蟹を差しむる面同ふ生て二度人と面と對をきと禮服捨服十文字に換りて三千九歳を一刻と経む。蟹くわなをさりて長政の勇猛除れ石舟守赤尾安作守漏刻内木村を即次郎治源氏邊廻り中流九郎次郎を百八十餘人城戸を開き切て出村雲立する小団の大軍をゆとりせしび縦横を盡よりて血を庭柴



信長安土山築城

羽柴秀吉政に落松澤に城

惟任稻葉義高鷹お嶽津伏城



田辺田が勢死傷の者殺をもてて滅失勢元來討死とえ知らずとて  
一足りず當て退行に三度計謀合へが武歎と組く海を遠て  
死をあらわす私軍の中よ切るく令全き者とて一人もゆうや  
く其中に涉事石舟守赤尾英徳守あん運挫く柴田と庭をもへは捕  
まぬ今人浦野内安治とて強勇多戦の兵ありえり思ひ没けるる  
とは只討死せんとて源へ敵中に切く殺さる者を切糸羅三財守  
戰ひてがえり逃走するも亦も死も負もとよく進む  
やう加茂虎之助福原市松行切核化三人をもてて不後よう討  
ら兵討死させむかと云ひのうして生捕されしと云ひ木下が旗  
かより加茂虎之助福原市松行切核化三人をもてて不後よう討  
てうち浦野が乗る馬の毛根を我一ひと突通せばのれ内馬とす

將もたまうえだ差違をまいて落するを加茂が良事お村と天九節亭  
あて難く繩をうけたるもくねくく出井の兵士めつなく討きぬ  
とは信長城中に入り討ち首とも実摺し降參す捕のれ卒を石川  
まゝ仕事渡される中又三回丸を清門尉小姓本佐後さる兩人移邊  
津奈比賣とて首が別られはせ石舟守赤尾英徳も出井の老  
獄として長政より心を憐りてすに歎慰て飴食取附けゆ云便  
口歎の曲者とてこれも向く隠せらる此付木下後吉即のす浦野  
新内を連れ御船に上りやる此者生得大罰すと百方の兵とく  
とも群ぐる小兜を刀を抜び一命を抜け御内よろしきとて何様大半の  
御用も勤めざる者のみと術へが信長よりみて浦野が勇男の譽雪  
をほく石舟しげ洋宮あらて秀吉が幕下に属せらるる内も木下

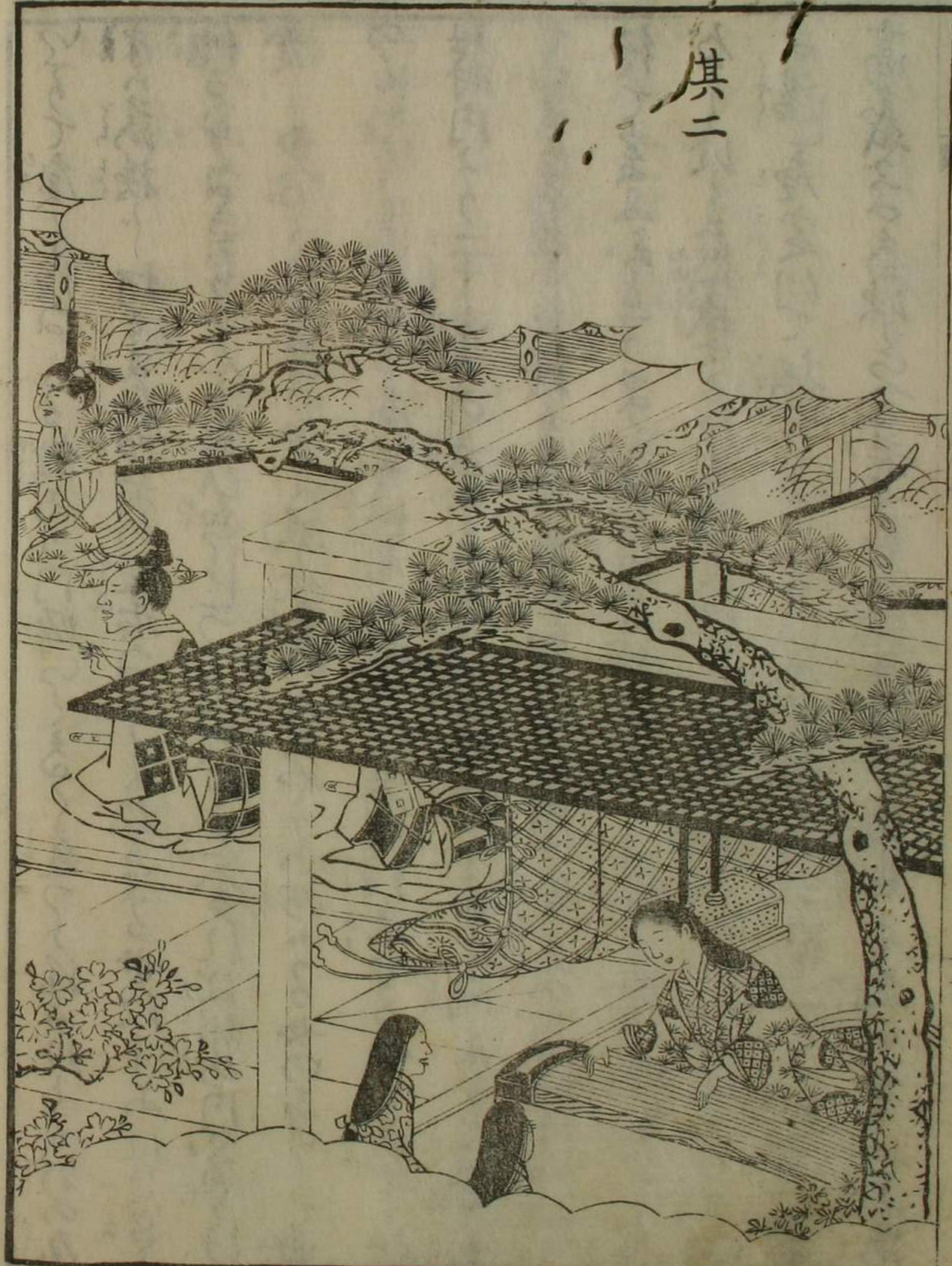
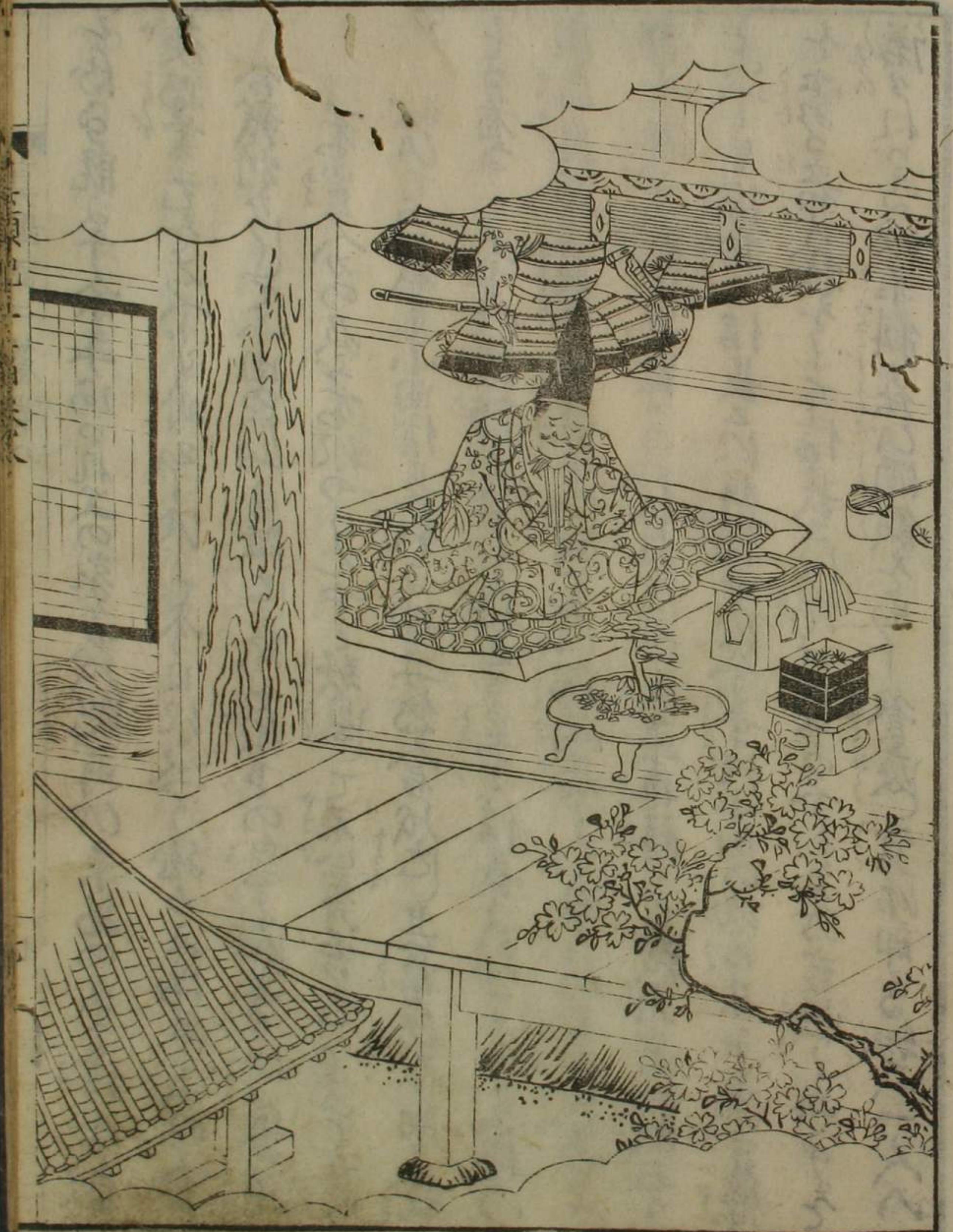


文智さるち又取とげ一謹ひしんでそを長ながくこれよう下げが居ゐ下げとうもとす宴うたひに於おひて  
信長のぶなが小谷おやの城じゆを本下ほんげ義吉よしよし郎らうの徳とくりに忍しのびて二十万石そその奉印ほういんを  
正ただあし多氣たけの勲功くんこうを賞たのむましに年來ねんらい小田家の怨敵おにぎより知しる  
倉持くらもち井い附つきよ滅めつして城じゆを近ちかに信長のぶながの御ごとへ御修ごしゆびえ方かたを以もつて  
長政ながまさの室むろを小谷方おやと雅よき風ふうと尾おノ山さんの邊への城じゆを小田おだと野助のすけ信包のぶひ  
又取あけあひ九月六日諸陣しょじんを拂はひ波阜はづの城じゆを凱陣かいじんに終しゆひタ殿だい  
因いん此度このどううをあらう

義吉郎よしよしらう到いた京極きょうごく高次館たかじかん

本下ほんげ義吉よしよし郎らう秀吉ひでよしの此時このとき小谷おやの城じゆに近ちかに深圓ふくわんの守護しゆごとあり妻め  
民みんを保やまんと耕う作さをたとめさせたのであるが此圓中このわんちゆうに志おものび  
行ゆきんとも是そこ東ひがしと山林幽谷さんりゆうこくが悉すべく近ちかに小観音寺こくわんいん山さんの林はや

ひそて度ひろくははしる館やかたあつ門もん帰かへてもく遠とおづれども影おひの尾おひ  
あらあ換かわり何なにある者の住居じゆきうぢりもれどもせひりあんの臺だい  
地じうりぬきかうかうんと思おもひよしつ門内もんないを見みるが鄰となりの内うち着きうけ  
渡わたりよべきたる奥おくの方ほう又琴こと絃げんのあらやうふめうる女のまゝまゝて曲まげ  
のほぐもよべたる秀吉ひでよし後あと者もの又命めいけ者の住居じゆきかるやと爲つくしむ  
此財内ざいうち二十金かなの武士士官三さん出でた宣あらわひ行人ひとと向むか本下ほんげ後あと者もの  
て曰色いわいろの國くに小谷おやの城じゆを本下ほんげ義吉よしよし郎らう國中くにちゆう巡まわ見みる山林幽谷さんりゆうこくと  
經たどて寔まこともとよく海かいが姓せい名な字じをよて謹ひそぐれを恭そそぐにして秀吉ひでよしが嘗なまめ  
の酒さけ座定ざだいにて相あわ言ことてやうりのまゝ先まへの近ちかの圓わんを京極きょうごく高次たかじと  
高義たかよしがよる波はとる者ものを人ひとはせせがねよ國くに郎らうを押おしやすれ零れい



とあひ既に十余年事にわざの御名を祀再び京極の氏と終へて日  
英の書をそらべども時を以て今日に至らず恐る謗聞長政す  
も合戦利かして小田のためよ滅亡に終る家トの鬼とよきう附連の死  
もあり本草今カの及ぶあいわんやと致恩して不心秀吉毛をみて高  
次よりて曰我主小田信長事よ汝其の倉城に其勢ひ京極又故  
も者うく天下に授柄七八を極り是下信長よたうて京極の  
家再興らば忽幸落第し此にて獨閑居して附近のものを狩り  
船を駆て射と鳥をうげ難るにこそ次再辟して我主走出新す  
とつとも徳才く信長云に拜謁せし今幸に小田の功臣本多忠徳  
を蒙る希に我主て信長云に謁せらるて之を秀吉岐く此すを  
議されば次不解法じ酒飯を缺一餐後即ち知ユ一人の

妹十六歳よりと同人ともゆゆく秀吉に謁せしむ此女客就差  
驛すて傾國のをあく秀吉奉參へ對面へ向て曰先々外面にあそ  
琴の音をよみがまく此良女の彈むかあらじある次言てく  
御秀吉大きに感ず頗真ひ入祝成多て一種よしし又えて琴と  
彈くも彼女舞どもをひど調合で春夢歌と云俗曲を心をこら  
て彈とほてうなづ勇猛姫の秀吉もこそぞ仙境のなりと云ふ  
はとし弟とてうなづ勇猛姫の秀吉もこそぞ仙境のなりと云ふ  
御酒ありて先ほじと價とて秀吉宴もと盡を納りさせひとまと  
告ぐ三度高次足守門あと遠す出信長云の御本ほじく御膳  
就きると懇みねられ秀吉其の膳を評議して別として小谷へ  
ゆづる其後事の序をみて信長云も次見けう零落を言ヒ泰若

お後の後を承ひたが信長又迷る次も如く日見付られは事と  
わ外を揚う再び余極の如き成奥（つむぎ）をあらまし秀吉が力くされ  
高次是身自合（しゆう）に秀吉の恩と報りんと候ぐ限（かぎ）ある次が嫁（めい）  
後より秀吉が那座（なざ）より仕ひ松風庵（まつかや）と號で寵毛肩（こみけいせん）を並ばす者もたゞ  
姫ひ女もまづうなう

### 三姫義次亥期

亥より内圓君（うちわちゆき）の城を三姫たまち浦義次の故三姫長安（おがとう）を捕（つか）まは  
て元赤足村家の懲歎（せいさん）をれども義次忠義の心（こころ）始終（しゆうごん）の軍をひき  
國（くに）きり義昭（よしめい）を企（く）て附（つき）も一端（ひとはん）御味方（みみがた）に係（つき）室町（むろまち）又籠城（くらじゆう）で  
しゆくも御和睦（みゆくわ）の後居燃君（ゐぢるこみね）引退（ひきだい）き籠城（くらじゆう）てみづかふ宿（しゆく）の軍を  
奉手鷹（まてたか）又籠らで往ひ又義次を戻（もど）さしつかひ入心の妙方（めうぼう）と

の連もお軍をの御運亥より鹿（しか）とゆりひげをびハ御味方（みみがた）をまづ  
居燃（くらじゆう）又籠（くらじゆう）居（くら）るふすにてお軍を御軍利（ごぐんり）にいてお手鷹（まてたか）と  
退去（しりぞく）く信長が計（そなへ）して義次の方へ送（おもて）りまづ信長（のぶなが）を人を  
ほきあひて義次お軍あり細（ほそ）きて旗（はた）を君（みけ）の城（じゆう）揚（あひ）や否（なか）  
を擇（えら）りとをまく義次よくも其心（こころ）をあほすよお軍を毛利家  
一殿（いつでん）手（て）せ賄（まわ）く信長が競（あらそひ）ひ先（さき）にびりと此義次の軍義昭云  
乃御妹（めぐわい）舜（じゅう）めく志（し）も勇武（ゆうぶ）経論（けいりん）の兵（ひょう）なれば信長よりて跡（あと）  
くゆひ鷹（たか）よお松永彈（まつひやうだん）ふ今秀義次がお軍にまづ伏毛（ふも）の御達  
の企（くわく）と信長と信言（しんごん）しが通（とお）じつらかくて恩（おん）しつる義次りし  
さく紀明（きめい）も及（およ）び同年十二月松永彈（まつひやう）ふ首（くび）身服（ふく）蒙（まつ）が丘（おか）と催（さな）  
大軍義次の城を立圓（たてわちゆう）をもつづけまさらしる義次籠城（くらじゆう）の士卒

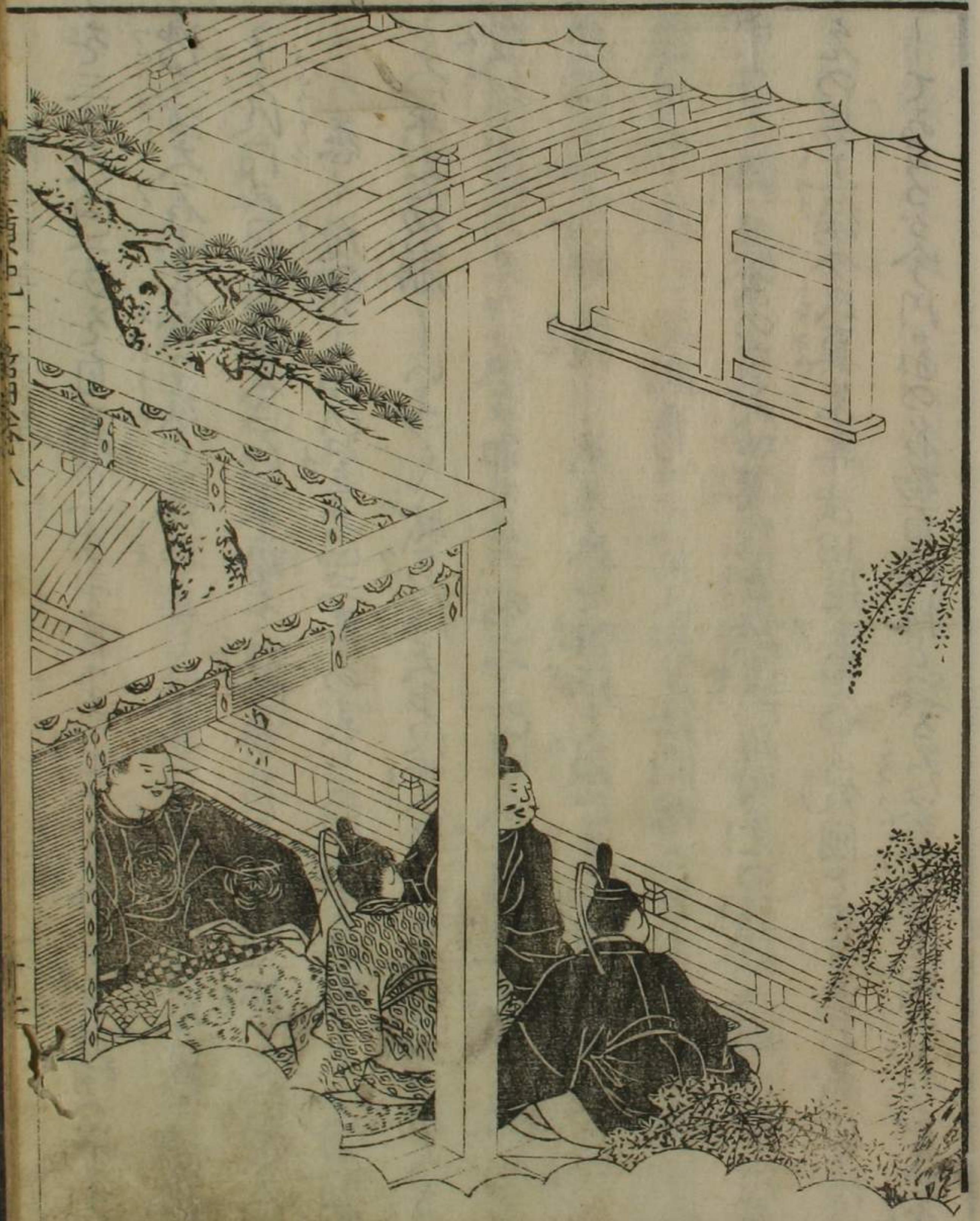


に之金へまじく防ぎ然へ左在うく落城せしむる忍みあらぬ城  
中は義定郎友忠の者歟歎ね佐久間信忠よ西廻小田勢と城中へ  
引入う義次今こそまでちうと遣兵又百余人を率ひ松永之秀が  
てま家経の事まじくに切て入本方力を集めようど大意そゆうう  
ひふえ秀三坂義次が言ひの言よく承れ女人面歎心故修羅大主長  
慶が大恩を蒙りて奴僕より経より救ひ圓のまゝとゆり仰又安宅院  
津守が後害一私足内穿毒敵我幼年と進む義懸公を  
弑めきり今信長又退避てま家の弑め又向ふ極重要ノ分すや天  
罰ゆて來て又年を経じて安堵が一家滅亡せん其恩しきれやとく  
又百余人が門と喰て安崩せばにの松永其理つや而くそん  
もんぐよ掛立られに方が門とおきうる首井順安入替つてお城ひ

少をもうち討つ討まて時移りて探冷が信長の大軍八方よりさう  
圍もあまとほと地がりてかく夷うるゝれい義次心に懼とつとも  
數ヶ所のを負ひ今り合戦うひぐく脇撲切て死んでるをくわんと  
後兵ども一人も死ぬに差違へゑく討死へ絶ゆるにの城の落城

今川氏真属信長幕下

天正二年春三月信長上洛あつて従三位參議より昇進のひ見奏  
まつて南都東大寺より納らるゝ蘭奢待の名香を例よりせ方一す  
が切玉経此香の生よ東山殿拂不厚をあつてようう繁榮代の名軍  
家経のゆもろしげ信長云々徳松勢醫すにて終は勅許也  
鷹の日時大納言輝資卿越前守中納言雅教卿勅使として南都  
下向ひ令して蘭奢待を切らせ終は信長憲で経則其香



を三かに二かを自殺め二かを呂下の諸くよ分ちとて珍み此年と  
猶人空太名小名或ひ義とスハ思ひと信長の屬せんのえと称う者か  
うかに日又月信長また軍勢を廢勢及長崎の一揆を討秋九月  
又も悉く謀叛一揆ひ翌天正三年のまゝ三河國長篠つて三河賄れ  
が大軍を切崩しのよへ感名代天皇へ震ひ其年の甚ひか人々を  
受死ぬに由本下爰吉郎を範る守は氏を羽柴と改む明智十  
兵房を日向守ゆほりそも氏を惟任と改む明智十  
進所作と号す庭永秀は是角又郎左衛門博丸郎右衛門を原田俊  
中もと称其余の家人加階のゆゑに後此財光の發はの國守今川義  
元の男上総の氏真先奉武田信玄がゐる外國と奪ひ又畿内よ漂泊  
してみづつが今川家の名物百櫻帆と云ふた高麗國の名譽すま  
の脊髄を信長より改めて小田の幕下に属と此よもの脊髄を  
玉立て双き墨立ちとまぐの手持みく弱ちの墨物と御どのら  
秀吉これを獲て徳川の解征伐の附肥前國名護屋の陣中又渡  
海の船中にかひて脊髄を崩し秀吉危急のゆゑものをのぞれ終ひて  
度くこの篇より此氏真の跋扈の後人々と信長公元を不謹  
慎ひ生氣の節相圖寺よゆひて跋扈を終ふされ事との云御殿より  
以道よ堪能の人々を集めて見物猪の氏真船御を圍ふとまく  
堪能するをども蹴出さればと人感絲の度堂よ先や氏真あいと  
さとうれぬを武道よ得るが勝を屈して信長が幕下の辱めと嘆  
ゆきあざとあよ武門よ要さき妙義ようけり軍事よ兵書に勝まくと  
跡まき仕業うと嘲う者のもまく

## 柴田近作主落板津に城

玄佐の主ふえ年信長云誠本を討て朝倉義景を以て一團悉  
小田家の有とうじども容易よ平定ぐとを以て秀吉が徐略み程  
せ陣主の後を以て一團成すらせ重ひ危勢を征伐しめくとて秀吉  
が見ゆ遣りて毎回毛若増井等の民を集め桂田魚住を攻殺ト  
武部毛浦系後源三郎系達もと同心して國政を統制し安江加賀  
國か新寺家内の一揆を配給し扇權助を歟其不徳とて新寺  
一揆家老下向後法橋松浦を破法橋兩人加賀國へ向て織  
勢をもろひるが津國誠本の鶴倉義景を滅ぼし其家人等もと妻  
て園氏奪し權威を重ひ國中と強劫せしる衆惡きゆぢうとて  
彼下向松浦有人をもとて加賀の百姓を燃す傍り且や願寺の彰門

跡の義景の聲若かしに奇ひて捨置くにと誠本の門徒等と合  
て大軍をみて美濃を富田毛若増井等一人もあらず悉く討殺し  
終え誠本一揆又新寺の後をめくとて仕事等を建て國政を統治す  
こそひと暫くも難かくして國中とよりと強劫と此時信長諸方の  
新経大概平賄くとての前これらが誠本の一揆か新寺の門徒  
を誅戮とにして天正三年秋八月十万余騎の大軍を置敦賀の  
はと進國守護代下向法橋これを防んとら民まとおきやうかく  
また信長の大軍を浪のあく押すれが甚恐怖して放て一人も下向  
うつて走つて皆山林へ逃げ下向後いづくともとぎやうかく  
まぐる武大坊を浪今とめり集めり要害の邊へようく欲と存  
し信長の先陣柴田近作勝ちの勢又余騎十騎のまことに



ははれ城に捕を圍んで喜んでうるお城より大勝の  
秀忠寺とよふ惡僧をしてこれを助る勇士を以て中勢作並七兵衛三箇  
宗安寺の敵へくろぎ城へ勝家が士卒死傷の者甚多く是に由て紫  
田正作一計を出 億は後陣より軍勢を引と城を捨て退散と城  
中これを見て秀忠軍をまじめで退く内裏の出来たる者らん退  
きておれしとて中に中勢を勢を引て駆け出る秀忠寺とよふ惡  
敵方仰の計略と謀る其隙空に入るをと遙く制としとひる  
の中勢を攻めど城戸を開て先一矢を射てからが紫田勢とんぐ  
かく殺をも中勢勝のうて又丁計退れぬる右の方に紫田勢と  
ほが守二百余騎を引て切て出しが左の方に勝家が勝近之間を番  
二百余騎をもと喰て対する勝家勢門附よしと遙

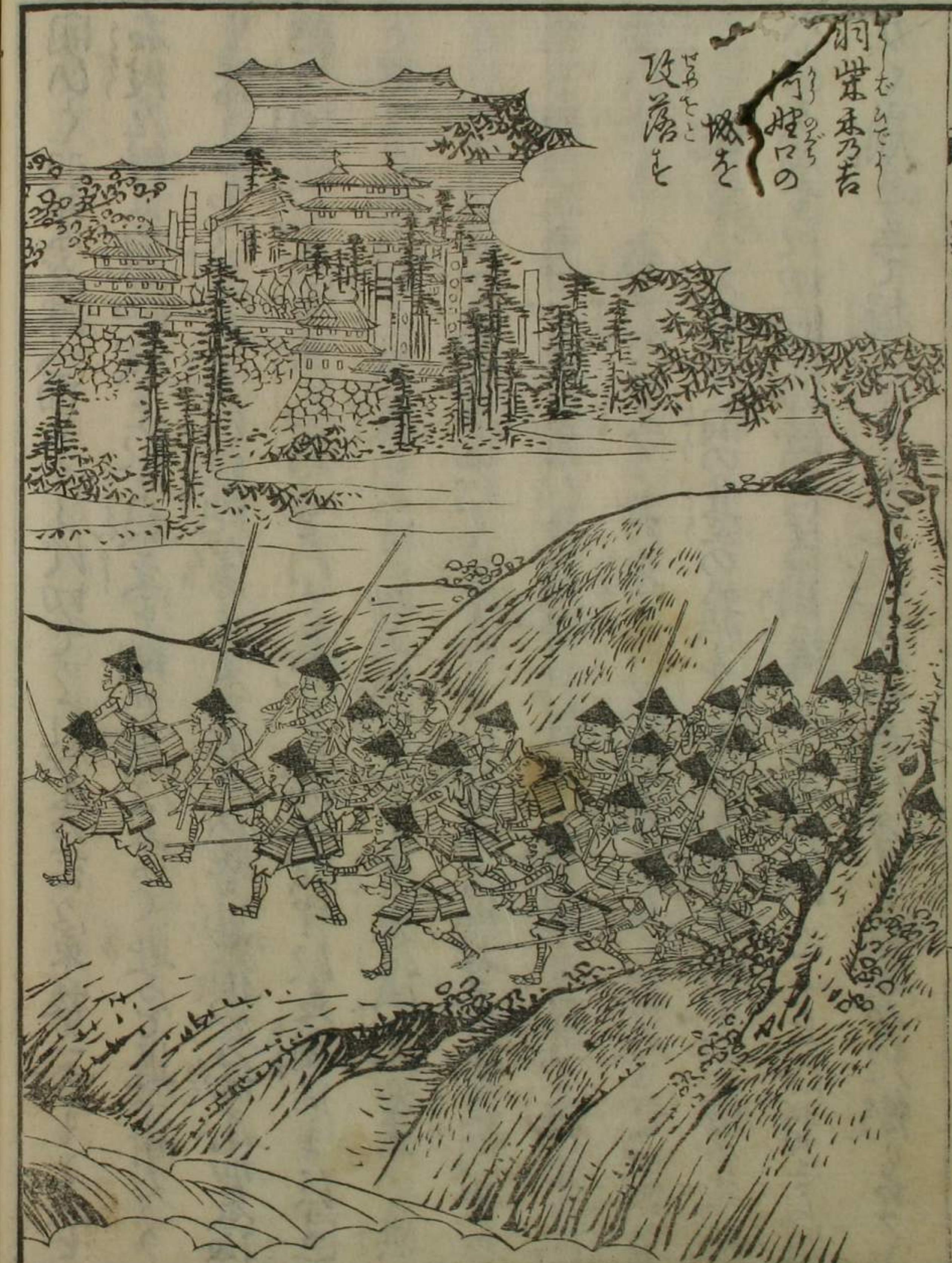
三方より撲立し中勢先きた勝見狼狽驚き逃げてを仇向す  
馬とはとひまや勢が上常撲をも宿よりさげを陣にして引を  
中勢が良等十余人を討せりと切先と撲へ討てて防護を大を刀を行  
くにぬき車切よ蘿例せば只一あい三人又人をらくと切削され忍  
て近寄者りは此中勢りと船倉のあひて勇猛の度に壯士れ  
ども玄蕃が怪力に歎れるゆ被りてをもくとして生捕をぬ大ねがく乃  
びくならんが活兵ども右往左往は數回只船のまく迎えられ  
紫田勢勝はるゝをもむかはるに方を十キ二千キよりを圍み後炮とお  
み火矢を邊廻をもはが美うちされば機兵鉄並七兵衛三箇宗  
安寺も蘿城叶はほじと思ひうるふや大ね秀忠寺を討敵一員を  
みて津進しげ紫田正作城より軍を体に侵者を坐て此旨と

信長と河進と

羽柴秀吉攻居河畔に城

勝羽柴義兵守秀吉の勢ニ又百騎を河畔に要害を構  
て居城を抑あら此城の大内若林長門守嫁る朝良即西今も  
よ勇氣のすうておほく雲石壁遠巖防き城が双方勝負の  
色見て、勝く所を極め候はる所は惡の方面の勢ひ烟を立て抑素志  
兩陣何處の勢なくんとこれを以て南至不可思議光榮寺の九文  
字が記する大旗を生まてや立羽柴が陣後より至三三に切て掛  
る羽柴勢大に勝たる所はあつて体を立ひ城を捨て此勢を防  
んと城中よう乞を乞ふ新守宗門の助勢からぞ此方を切て  
出居換んでお崩せと若林新又即安井左衛門尉に百余人城戸と

曰ひく羽柴が陣一面もあらず切てられ秀吉が軍勢一すもそぞ  
右近た縫ひ教亂我先と殺さむと城兵勝みまで遡ると近十町ぞうり  
も走りて忽再トヒ鉄炮寄と秀吉伏勢勝頃が城尾加賀道  
橋行切涌坂又百余入一日よどくと殺り立城兵兵中に丸圓山にほ  
と揃えられ討る者麻のぼし此時彼南を不可思議光榮寺の旗  
をはじつてもの勢ひよ向ひて走る所は若林長門守ハ  
味方敵ひの勢ひとと思ひ又懼も心ちくゆひして詠ら居るを彼  
勢ひくと城兵よまうあ忽九字の大旗をみて捨えうのゆき  
あ生疏草の太馬印相の臺の旗をもとと齋せ我先と城守へ孔  
へあら成幸に切例せば城兵も周章うち凡防人ととあ者さらば  
かく崩き立て掘りよつ逃出しがたる長門守も城よがれ御もなく



毛利・關・土率・又・終・之・遣・し・秀・吉・下・而・て・燃・え・ゆ・と・う  
け・燒・手・し・ば・彼・討・て・ゆ・し・新・又・郎・右・房・門・尉・兩・人・も・く・よ・討・ま・れ・城  
ス・ハ・ト・チ・ク・モ・テ・ア・落・城・と・刀・く・ま・連・烟・る・く・三・登・れ・ば・進・む・に・石・り・退  
く・み・巷・を・失・ひ・七・額・八・例・して・狼・狽・を・羽・柴・が・勇・兵・行・端・よ・う・切・三・れ・ば  
そ・者・一・も・よ・く・皆・悉・く・斬・り・た・る・此・日・將・附・の・然・じ・よ・切・五・首・三・百・余・生  
捕・に・百・人・之・秀・吉・勝・軍・を・納・め・て・信・長・公・よ・渡・進・と

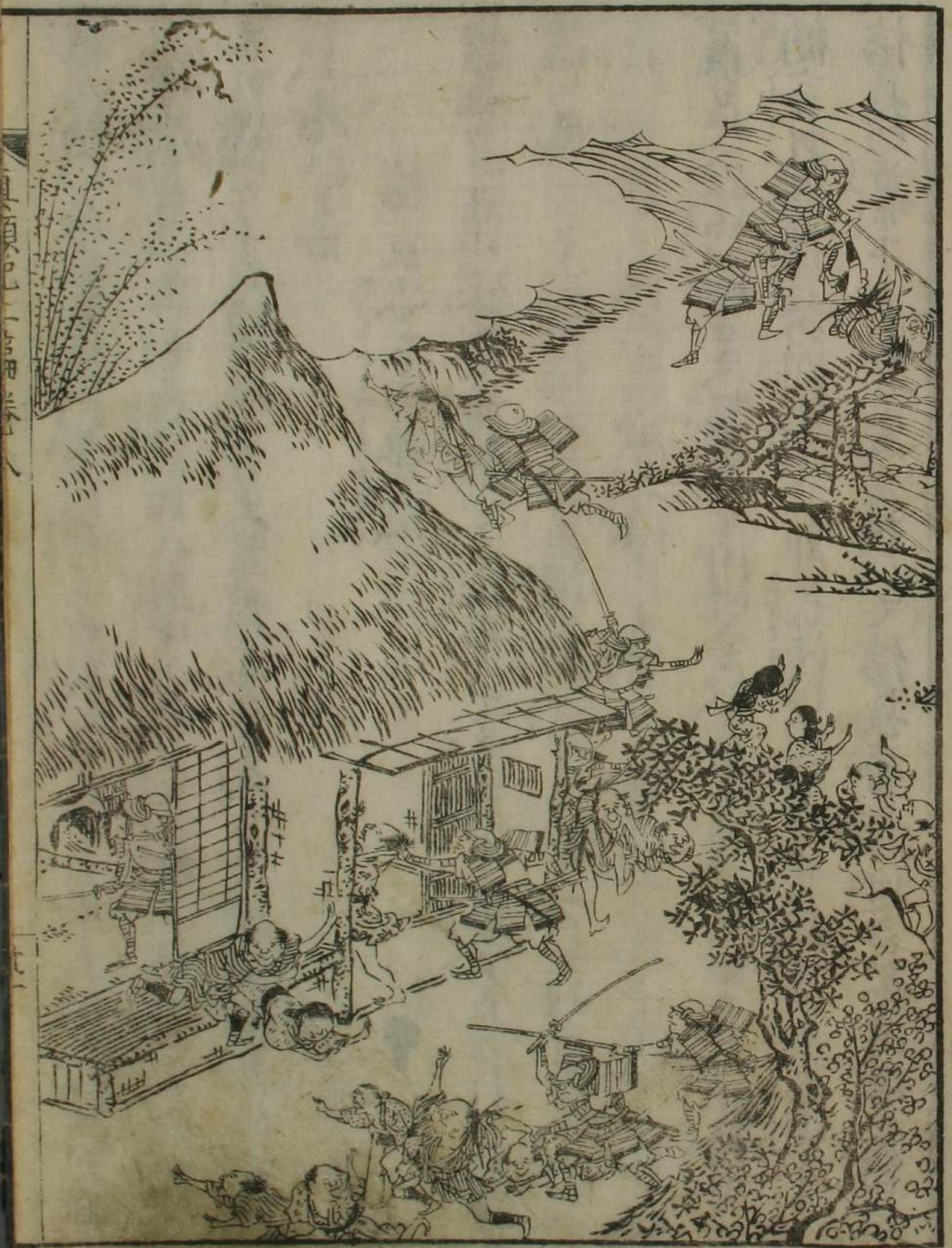
惟・任・稻・葉・美・落・鷹・打・嶽・辭・伏・城

本・之・岡・山・鷹・打・嶽・の・城・に・ハ・固・の・か・室・寺・石・田・の・西・巖・寺・等・三・る・余・人・又  
て・龍・マ・ク・ラ・グ・惟・任・日・向・守・光・秀・も・勢・み・ヌ・百・人・城・除・押・あ・外・喧・ん・で  
美・ラ・ラ・城・中・ま・勢・も・と・ど・ね・松・波・の・落・城・を・ま・ね・じ・え・よ・一・揆・承  
の・集・り・勢・え・れ・ば・恐・怖・の・心・な・き・の・強・ら・だ・防・禦・の・佈・令・く・だ・只・強・勁

の・じ・て・み・く・る・不・れ・又・河・渡・の・丈・の・多・く・遙・く・て・そ・れ・も・落・城・せ・と・罵・  
殺・こ・そ・わ・れ・ま・脛・痛・ち・る・一・揆・原・我・も・く・と・落・城・す・ぞ・坐・秀・嚴・發・不・勅  
て・麦・立・く・終・よ・城・戸・を・素・班・つ・城・中・(私・も・入・ざ・ん・く・よ・切・て・ゆ・)・い・ば・討・る・  
者・數・を・も・く・び・大・ね・草・学・寺・西・光・寺・の・両・坊・主・人・を・捕・は・討・え・首・又  
百・余・級・け・燃・も・其・侯・史・を・う・け・落・城・を・諸・方・(も・せ・よ・わ・を・そ・け・育  
信・長・云・)・進・と・稻・葉・伴・豫・六・一・徹・ハ・辞・休・の・城・(捕・あ・る・が・出・城・よ・駿・さ  
松・浦・を・信・長・云・)・進・と・稻・葉・伴・豫・六・一・徹・ハ・辞・休・の・城・(捕・あ・る・が・出・城・よ・駿・さ  
あ・く・村・中・キ・で・押・あ・と・あ・よ・諸・方・の・城・く・嘴・く・馬・方・(途・え・て・敵・て)

欲する者一人りて候。又龍門寺の塔より三宅櫛兵衛尉小勢よりも  
爲ふ情をねどく籠城と小國の大軍に方々五圍を窓卯を抑げお  
とく踏崩しね率ともう斬殺せばト同法擣板浦法擣板等も加賀  
國(おほ)に進みて城本(きのと)を向て者曾ては御食事部を補。系(くわい)三郎  
系(くわい)三郎系(くわい)胤(おとる)も一揆(いん)又(また)此附(こづけ)とよりうぐてみるが再信長  
に陣(じん)を乞(こ)ね中の本陣(ほんじん)來(く)るを信長深く惡(おこら)ひ三(さん)ともの首と  
刎(めつ)ぬ門(もん)みつけられし。又(また)板(いた)もか殺寺(さつじ)門(もん)後(うしろ)の妻(め)諸(よし)國(くに)よ(よ)ろくて動(うごき)一揆(いん)  
を犯(いたずら)し徳(とく)堂(どう)を破(は)び國(くに)を耶(いへ)。又(また)爲(あつ)謀(ぼう)如(ごとく)我(わ)を死(死)ふまよ。又(また)大方  
ち(ぢ)ば信長(のぶなが)を憚(のぞ)り城(しろ)の門(もん)後(うしろ)僧俗(そうぞく)男女の居(ゐ)別(べつ)と悉(みな)新  
捨(す)よとて柴(しば)田(ただ)之(の)間(ま)羽(は)柴(しば)惟(いと)任(おん)是(これ)角(くわく)爾(そぞろ)矣(や)。又(また)安(やす)美(み)兵(ひょう)が安(やす)美(み)兵(ひょう)  
兵(ひょう)を率(たど)り國(くに)の臣(しん)方(ほう)又(また)別(べつ)三(さん)城(じゆう)廊(ろう)壁(へき)瓦(わ)美(み)陸(りく)民(みん)が村(むら)を燒(や)

老(おとこ)少(こども)のき(き)ひ(ひ)か(か)く山(さん)國(くに)の者(し)ヒ(ひ)かれバ山(さん)林(りん)幽(ゆう)谷(こく)樹(じゆ)蔭(いん)藪(やぶ)の中(なか)  
ま(ま)でモオレ(おれ)求(さが)し。愈(ます)く切(き)歛(うなづ)き院(いん)僧(そう)坊(ぼう)ハ(は)お(お)達(たつ)檻(はなわ)崩(くず)し。燐(りん)輝(ひ)嵐(あらわ)  
闇(くろ)を殺(ころ)とぞく根(ね)系(けい)を絶(きり)て押(お)し殺(ころ)し。又(また)堂(どう)を模(も)倣(うなづ)てノ(の)模(も)倣(うなづ)てノ(の)殺(ころ)  
星(ほし)くと丘(おか)のび(ひ)く。又(また)一(ひと)國(くに)の人民(じんみん)害(いた)す。斷(だん)罪(ざい)を下(お)すと(と)の者(し)殺(ころ)と(と)ひ  
忍(しの)ぐ。肝(かん)も消(け)去(はず)。又(また)編(いと)て恐怖(おそれ)。今(いま)月(つき)十九(じゅう)日(ひ)ノ(の)廿(じゅう)又(また)日(ひ)モ  
討(うなづ)き。首(くび)殺(ころ)をも(も)うじ。信長(のぶなが)を刃(いの)で候(まわ)。又(また)候(まわ)して大(おほ)き轟(とどき)轟(とどき)轟(とどき)轟(とどき)  
ノ(の)敵(てき)。又(また)とて九(こ)月(つき)三(さん)日(ひ)朝(あさ)に令(いみ)を下(お)して柴(しば)田(ただ)羽(は)柴(しば)惟(いと)任(おん)是(これ)角(くわく)爾(そぞろ)矣(や)  
の藩(はん)城(じゆう)とて城(しろ)本(ほん)一(ひと)圓(えん)以下(げ)。燐(りん)輝(ひ)嵐(あらわ)の底(そこ)に燐(りん)輝(ひ)嵐(あらわ)を小(こ)國(くに)七(しち)石(せき)  
勝(かつ)。又(また)威(い)勢(せい)日(ひ)暮(ぐれ)十(じゅう)倍(ばい)。又(また)陰(かげ)て室(むろ)の小(こ)國(くに)の長(おさな)。信長(のぶなが)の勝(かつ)服(ふく)  
勇(いさ)く。又(また)とてノ(の)うノ(の)う其(その)外(ほか)城(じゆう)の壁(へき)を望(み)。寺(じ)の塔(とう)より三(さん)宅(じやく)櫛(くし)兵(ひょう)衛(ゑ)尉(い)



櫻花門傳跡を守門多に守らせ敦煌の城より武藏織田守門大體  
四城の原義治郎金森義貞郎八府中の城が惠政を守門代く内裏  
等の籠城せしも月廿三日太軍城を立てて後漢國破阜に海城  
一發ひきあ

信長安土山築城

信長云小國の一揆を謀歎と語りて余内を遂らざれば天帝  
殊々幕へく心三後右大ね縦權大納言よりせられ候もなく内大  
臣に昇進し居其威石海内よ害き太業既ゆめうんと見られ  
眞乃太守内膳ま羅宗も御味方にあり鉄彈の圓を婦小諸中  
納言れ綱播刀の別不さへ小三郎長治は山城守契相も余若し  
信長の幕下より如く寔よ抑ひて信長帝都近き所にて城を築き

天子を守護りまんと要害の地をえりて筑くよひ名蒲生郡安土  
山こそ鬼竜の城也そ西北にはやう琵琶の湖水比叡山如意嶽  
遙々見湖中に竹生島の勝地あり南の村里平遠として三之山の風  
氣えん方ほ東の觀音寺山ア一據るよ帝都の街道みて昼夜  
約人の経る所は繰り返すの系地なればて天正元年五月  
惟任向守光秀よ總強を付られ是角又即ち守門を奉  
約し城番役を始らば近畿の大守官石切総治の人また一方  
余人集うて昼夜とかくに営むるよ其功慶ししづて二重の石垣  
七重の天守巍々然と雲を凌ぎ金銀を渾在のく殊ふどぞ  
陞よ築り城下に構へるねれを並般十万人を所で建  
つて小田の勢萬人の間が發しむる邊の玄真和尚信長の令



を夢う安云山の記を憶う其詩曰

六十扶桑第一山

老松棲翠向雲閒

宮高大似阿房殿

城儉固於函谷關

君不唐虞治天下

必應慈釋出人間

蓬萊三万里仙境

留與寬仁永保顏

城郭全く底枕ノ如レ信長ニ寔ヨ移リ強ひ嫡男勘九郎信忠ニ  
破阜の城ニ面リ終ニ附ニ同年秋八月加賀國の一揆蜂起にて大望より  
城を改シ城主ニ次右近ニ勢を立テ屢々戮ひ勝利を得るゆ度  
是より一揆原太勢なれば討とも切とも車ともされ新もゑて而ヒ連  
日は戸次右近業回勝並に加勢を乞勝家のゝ思ひ惣角より寄  
此催足よ淺川寔ヨ抄シ右近妻云の城ニ急便を馳て信長に往

兵を乞ス信長假者を立て奉の次第を忌ム勝家が加勢を乞  
ざる代起り終ニ諸侯反て征伐ノ終ニ又羽柴義姫を守護ニ命シテ  
之を紫田固近作戸次を駆けぐるゆ右近ニ功を立モ也と因ニ處す  
加勢の一揆を懲んみ近作が甥佐久間ニ番盜攻を立て大聖寺の城  
み逃右近ニ代へ紫田固ニ命シテ加勢をもばしめ忽一揆平定とし  
とく信長暫く慈恵にして恩惟く終ひうが良ゆく兵敗落ひ秀  
吉が計議妙と志ひ番盜攻より余人の退兵有る天聖寺一  
若向らるる志番元来一万ま不當の勇士なれば大にうちとび急ぎと  
あて詔き叔父近作ニ信長の命令傳すと秀吉が遠參ニ遣ひ  
紫田勝が監攻と力を合せ一揆平定討り終てひんぞもと欲ども  
き只我み躬のまく教亂(後)又加州も平均さう勝家空攻假者

を安古にまくはる委細は後進へなれば信長の秀吉が遠計とゆ  
ともも感ト終ひたはとぞ



繪本古圖記二篇卷之八終

